

外以... 第書叢堂寶文

女男

一

書

之

曲

五

天

正

法

法

法

法

法

法

法

法

法

法

法

法

法

法



はしがき

禮行人道

其交際の飾にして奇も人として禮を

む人道

るを以て古人既よ人として禮なきものは

禽獸

類をりと云へりされむ男女は別なく禮節を守

り品行

を正しふ是るこり人たるの道ならぬ

亦古

の文物輸入してより以來我が國古来より禮

未

禮式轉た社界より斥けられんとするの状あり

豈慨歎小堪ゆべけんや

夫れ紳士才子にして禮なくんば紳士才子と云ふべか



らず淑女佳人ふして禮なくんば亦淑女佳人と云ふべ  
 から老故を以て上下貴賤の別なく能く我國禮を守ら  
 ざんぞ唯に人たるの道に缺るのみならず我國風を汚  
 すの恐なしとせず此より於てか本書の上様有る所以成  
 本書素より小冊子と雖小笠原禮式を規範として日用  
 最缺べからざるの禮式を流述して各々不讀者行文の  
 拙劣を咎るなく本書を繕て幾分か得らるゝ所あらば  
 子の満足尤更なり書林の幸福亦大なり清愛讀を賜へ

明治丙申初夏

編者しるす

小笠原流 男女諸禮式大全目次

- 第一章 緒論
- 第二章 起居の禮
- 起るとき
- 歩み出すとき
- 座するとき
- 席上を歩むとき
- 席上にて人の前を通るとき
- 席上にて人の後を通るとき
- 二人の間を通るとき
- 途上にて人に逢ふ時

- 行進の時
- 途上人を拝れり時
- 案内を請ふ時
- 照介に依りて目見る時
- 賓入を案内する時
- 座禮
- 〔甲〕真の禮 (貴人に對す時)
- 〔乙〕行の禮 (公衆に對す時)
- 〔丙〕草の禮 (下衆に對す時)
- 立禮

- 〔甲〕最敬禮 (貴人に対すとき)
- 〔乙〕敬禮 (公衆に對すとき)
- 〔丙〕略禮 (下衆に對すとき)
- 女子の立禮
- 第三章 言語及眼禮
  - 一般の言語づゝり
  - 他人と話をするときはの心得
  - 他人の話を聞くときはの禮
  - 貴人へ話をなすときはの禮
  - 一般眼禮の心得
- 第四章 態度及衣服扱方
  - 態度 (容子)

- 衣服の着せり
- 衣服を着せる禮
- 衣服を脱いで積み添
- 第五章 席上にあはるの禮
  - 應接の禮
  - 貴人の席に入る禮
  - 扇子の遣ひ方
  - 煙草の吸ひ方
  - 茶の呑み方
  - 菓のかみ方
  - 障子襖の開閉方
  - 目上の前にて事を終る禮

- 人の寐處へ入るときはの禮
- 第六章 寝を進む禮
  - 茶の進め方
  - 菓子を進め方
  - 煙草盆の進め方
  - 火鉢の進め方
  - 扇子及び團扇の進め方
  - 物を扇子に載せて進む方
  - 小刀の進め方
  - 硯及び新紙の進め方
  - 書籍の進め方
  - 書狀の進め方

- 墨のすり方
- 軸物の進め方
- 碁盤の進め方
- 手洗水の進め方
- 第七章 受渡の禮
  - 辞令書受渡の禮
  - 書狀受渡方
  - 品物の受方
- 第八章 人の家へ招かれたる時の禮
  - 家の心得
  - 着座の禮
  - 相伴に招かれたる時の禮

- 菓子くわしの食くひ方
- 餅もちの類るるの食くひ方
- 膳ぜんの受うけ方
- 膳ぜんに向むかひ様
- 箸はしの取とり方
- 第九章 諸物見様の様
- 玄花げんばの見様
- 書畫しよゑの軸見様
- 器物きぶつの見様
- 書幅しよばくの様方
- 書物しよぶつの見様
- 第十章 飲食いんじきの次第

- 膳ぜんの受うけ方
- 臺たいに載のせたる湯ゆの受うけ方
- 盃さかづきの受うけ方
- 飯いりの食くひ方
- 汁じゆの吸すひ方
- 廻り湯まわりゆの食くひ方
- 糲せ者の食くひ方
- 肴さかなの受うけ方
- 深漬ふかづけの食くひ方
- 麵類めんるるの食くひ方
- 返盃へんぱいの仕様
- 蒲燒かばやきの喫くひ方

- 飯めしわん椀わんの受うけ方
- 汁じゆ椀わんの受うけ方
- 汁じゆ椀わんの渡わたし方
- 楊やう杖じゆのつつかひ方
- 第十一章 客きやくを招まねぐ様
- 主人しゆじんの心こころ様
- 恰さしははの心こころ様
- 煙べん研じよ案あん内ないする様
- 床とこ床とこの設たてけ方
- 主人しゆじん中座ちゆうざする時ときの種
- 第十二章 聚あつ慮りよの種
- 膳部ぜんぶの括くわへ方

- 酒さけの進すすめ方
- 吸湯すくゆの進すすめ方
- 肴さかなの出だし方
- 飯いりの盛せい方
- 湯ゆの注つぎ方
- 膳ぜんを下くだぐる順次
- 燭しよく臺たいの出だし方
- 手燭てしよくの持もち方
- 蠟燭ろうそくの立たてかへ方
- 楊やう杖じゆの進すすめ方
- 銚子てうしの持もち方
- 家苞いへつぽの進すすめ方

●第十三章 婚禮の式

- 媒妁
- 見合
- 結納
- 詰納目録認め方
- 結納受取方
- 嫁資物の贈り方
- 嫁送法の禮
- 迎小袖の事
- 祝言の禮
- 色直し
- 床盃

○酌の禮式

以上

▲上欄

- 第一章 茶の湯
- 第二章 諸禮式補遺
- 第三章 女子言葉づらひ
- 第四章 婚禮の心得事

目次了り

上欄

第一章

茶の湯

茶の湯とて茶を  
 點てたり或は飲  
 んたりする式に  
 して古来より  
 家々世々  
 ありされども  
 此皆異なる事  
 なく唯人の考に

小笠原流男女諸禮式大全

京都 省軒外史著

第一章 総論

禮とは萬事に意を用ひて身は行を正し決して終末  
 のまじき事のなきよりつとむるを是れ主とするもの  
 なれば大いに面倒なるより思はるれども心を用ひて  
 之を守り修めなれば決して面倒なるものにあらずな  
 及つて万幸何事にあれ禮に遠はざれば不快を感ずる  
 ものなり然のみならず人として禮なくんば人なるの  
 道に及くものにして男女の別なく人生最も大切な事  
 ものこそ古来小笠原流と云伊勢流や云ひて各々禮に

續りて名々異に  
せしまでなれば  
本章には其の大  
意を千家の流儀  
に依り述ぶべし  
今茶の湯の事を  
述ぶるに先ち先  
づ茶道具の名稱  
より説き示さん  
とす

○茶道具の名稱

別あるが如く思ひ思はるれども決して大差あるもの  
にあらず唯其の禮の確守たるより後世其を手本とな  
し斯は名けしものにて何れも是何れが非と云ふ譯に  
は決してあらざるなりされは今本意を論ずるに際し  
其の標準を小笠原流の禮式に據り爾して最も當世の  
民俗に透するよう予が鄙見を以て取捨し聊か同胞に  
傾ち共に人道の本分を守らんと欲するなり讀者請ふ  
其の意にて國讀あらん事を緒言に代へて讀者に一言  
する次第なり

第二章 起居の禮

起居の禮とは即ち立ちふるまひの事に於て起居の  
禮は人生常に必ず注意して守らねばならぬものなり貴

○爐○爐縁○環  
○風爐○火架○  
茶巾○茶入○茶  
杓○杓蓋○水筒  
○服紗○薄茶入  
茶巾○建水○片  
口○水鏡○茶釜  
○菓子盆○菓子  
皿○煎茶○香入  
○茶殿○柄杓○  
灰匙○煎取○蓋  
置等なり

きと異きとに係はらず起居の禮は最も大切なるもの  
とありければ幼穉の際より習ひ守らねばならぬものな  
り我國維新以來泰西の文物輸入して面目を一新し儀  
つて衣服住居に相違を來したれば古來よりの禮は今  
日の立ちふるまひに透せずと考へらるるも謀なれど  
も決して然らざるなり實りに自分勝手な禮をなさず  
るより裁窮國特有の禮に倣がひし事肝要なりとす  
注意されたり

○起つときの禮

先づ起んとする場合には静かに両足を揃へてつまた  
て其より目上の方にあたらざる方即ち下座の方にあ  
たる足を少しくかゝめる心地にて起ち上るべし決し

○ 湯茶の懸じ方

先づ湯茶を懸ん  
とするには服鈔  
を三角形に四ツ  
折を立して其の  
一角を左へ寄り  
たる方の帯には  
さむべし  
其のはさみ方は  
男女に依りて異  
なるものにて男

て体を動かしたり又は倉庫に立つなられ無礼なり

○ 歩み出す時の礼

右の如くにして起ち上らば両手を兩膝にあて体を少  
しく前へかきめ一礼なし其まゝ下座の方に向たる足  
より静かに歩して歩み初むべし

○ 座するときの禮

座する場合には左右の別なく何れとも自分の膝手の  
方の足を静かに少しく後へひき其より兩足を折り座  
るべし、併ながら座りたる際に兩膝の揃はざるが如き  
事なきより注意すべし膝は必ず揃へ置を貴ぶなり

○ 席上を歩むるとき

席上を歩むるは一定の式あるものにて男子なれば一

子なれば帯の下  
にはさみ女子な  
れば上の方には  
さむが式なり  
新くはさみたれ  
は初に水指を持  
ち出で其より茶  
椀の中へ茶巾を  
たゝみて入れあ  
るを持ち出し其  
より茶入を出し  
て其上へ茶椀を

間即ち過一盞を五足乃至六足に歩み女子なれば六足  
乃至七足に歩むべし是れ一天を一足に歩むが礼なる  
より新は歩むものなり、併ながら物を持しときと持さ  
る時とに依りて多少斟酌なかるべからず物を持つ場  
合には持ざる時より成るべく細かく歩むを禮とす如  
何となれば物を持ち居るときは横ありてはならざる  
ゆへ一層慎を要するを以てなり、さて歩み出すに男子  
は左の足よりし女子は右の足よりすべし而して既に  
歩み出したは静かに足を懸にすり付け而して前足を  
少しく揚げ緩やかに歩むべし爾して持物なきときは兩  
手を帯腰り又は腰の處に直線に置きて決して無暗に  
動すべからず又た体を前へかきめたり反身にしたり



仰けにかける氣  
味にて載せ而し  
て之を茶碗と扱  
べて右の方に置  
き次に柄杓を左  
にて把りて之を  
蓋野にかけ置き  
其から釜の蓋を  
取りて蓋置乃上  
に置き同様に柄  
杓を釜の上に備  
向になすべし

我は腰を向たりなすは次の無禮なり故に直線に向を  
眺めて歩むべし次に歩むに際し最も注意すべきは歩  
みゆく席上に假令草履の如きものあるとも決して踏  
み越ゆるなれ又た腰の縁か敷居は踏まずして越ゆ  
る外りにすべし

○席上にて人の前を通るときは  
席上にて我が通るべき處に客人なれば客人ありて扱ひ  
其の場を通らざるを得ざるべきは其の客人の方へ向  
ひて両手を兩膝に突き体を前へ屈めて其の前を通る  
べし、されども其の客人高貴の人にして尊ぶべき時に  
は両手兩膝をついて一礼なし然る上にて下座に向ひ  
たる足即ち客人に向はざる方の足より先へ出して歩

新く準備整ひ  
なほ此より點茶  
にかゝるなり  
建水を心持扱ひ  
前に引き寄せて  
茶碗を右の手に  
て取り我が前に  
て中なる茶巾を  
把て左にて茶碗  
を拭ひて茶碗を  
前に置き其から  
右の手にて茶入

み始むべし是れ禮なり

眞し女子にありて尊卑の別なく両手をつきて通る  
べし、されども同輩にて格別親しき仲なれば腰をか  
めて一寸兩指をつくのみにても妨げなし

○人の後を通るときは

席上に於て貴人の後を通るべき時には前を通るとき  
は如く体を伏して両手をつくに及ばず腰をうめて  
兩指をつき貴人の方を軽く眺めて通るべし  
同輩のときは片手を膝頭につけて軽く眺め通ればよ  
るし  
若し庭先うなせにて貴人の後を通るときは両手を膝  
にあつればよろし又た前を通るときには両手を膝に

を把り茶碗を膝  
その間に此を買  
き腰なる服紗を  
把りて服紗さは  
きをなし而して  
蒸入を二度服紗  
にてぬぐひ次に  
茶柄を取りて公  
く二三度拭ひて  
再び服紗さはま  
をなして前の如  
き服紗を腰には

あつると公時に中腰にて通れはよるし  
○二人の間を通るときは  
貴人二人並ひて坐し居る其の間を通るときは両手兩  
膝をつき一様にして徐かに通るべし  
公衆の時は両手を膝にあつるのみにて空り庭先など  
にて貴人同士の中程を通るときは同衆の中間を通る  
べきと同つにてよるし  
○途上にて人に逢ひたるべきの程  
途中に貴人に逢ひるときは其入車となるも歩行なる  
も其等には係らず貴人より左の方へ寄りて自分と  
貴人の来たる間が一両ほどになりたるべきとき立ち止ま  
り少しく斜に一足ほど右へ足をひらきて両手を膝に

さみ更に又左右  
の手にて茶釜を  
把り蒸入を並べ  
て茶碗より少し  
く向に立て次に  
柄柄を右の手に  
て把り左に持ち  
かへ右の手にて  
茶碗の中なる茶  
巾を取り出して  
之を釜蓋の上  
置き直に柄柄を

あて一様なすべり而して貴人吾が前を通り越したは  
ひらきたる右の足より歩み始めむべし  
同衆のときは相方とも少しづつ右へより膝に手を  
あて一様して可なり  
此に尤も注意すべき程は途上自分より目上の人に逢  
たるとき自分より先を話をは掛たり又は何れへ御出  
るべきなせも其の行先を尋ねなすは尤の無様なり  
殊に女にありては最も謹しむべき事なり  
○行違ひの程  
廊下なせにて入る行き違ひたるべき時は凡て前條の逢  
たるとき同つたりと知らるべし  
○途上人と俤れまつの程

を右の手にて持  
ちかへ併けにな  
して釜の中に入  
れ湯をくみて茶  
碗の中へかけ柄  
杓を其のまゝ俯  
けになして釜の  
上にかけ置き茶  
釜を右の手にて  
りて茶碗の中へ  
入れ左手にて茶  
碗を持ち二度蒸

途上貴人と共に俤れたつときは必ず其の後に随ひゆ  
くべし決して傍遠く寄り添てゆくなかれ又た夜中貴  
人と俤れたつ時は前になり後になりしで其の人を渡  
る心にてゆくべしきれども前になりたるときは少し  
く右へ斜にまざるまみにて歩むべし而して活掛らるる  
事あるも決して其の受答のみをなし餘事を添るべし  
らず女子にありては種更とす  
公輩と俤れたつときは若し其の人自今より年重なれば  
心持後へ下る氣味にてゆくべしさなきときは相並ん  
でゆくべし併しなむら談話は餘りなさざるを宜しと  
すさなきたに途上公輩なむら話しなむらゆくは甚だ  
不味哉のものなれば心掛べし

く茶釜を廻し茶  
碗及び茶釜を洗  
ふこと宜しくあ  
つて茶釜を右の  
手にて持ちたる  
まゝ茶入と並べ  
置き其より茶巾  
にて茶碗を順次  
に無く二度拭ひ  
て茶巾を蓋置の  
上へのせ其より  
茶碗を右の手に

○案内を清ふとき  
の札  
貴人の邸宅に赴くときは其の門戸を出入するにも相  
當の敬札なかるべし  
なかるべからざるなりされは泥んや玄關等に至りて  
案内を清ふに相當の札なきを得んや  
先づ貴人の邸に至りたは次玄關より案内を清ふ勿れ  
必ず内玄關より清ふべし清ふときは衣紋を正しゆ  
りし取次の處で来らざるに先ち両手を兩膝にあて体  
をかめて待つべし取次来りたは爾るときは丁寧に  
其のまゝ体をつ屬かめ一札なしで案内を清ひ取次  
の再び處で来るまで禮義正しく待ち居るべし  
○照介によりて目見するときは禮

にて取り前に置  
きて茶入を右に  
取り左に移し茶  
碗の上へ持ちゆ  
きて右の手にて  
茶入の蓋を取り  
仰むけて下に置  
き左の手に茶入  
を持ちたるまゝ  
にて茶碗を取り  
あげて匙俵茶を  
茶碗の中に入れ

人の照介即ち案内につきて貴入に見ゆるときは先づ  
案内者の後に従へ両手を両膝にあて、体を少しく屈  
めつゝ歩みゆくべし而して案内さるゝものは貴人可  
坐し居る次の間までゆきて隔の敷居際に両手をつま  
最敬拜をなし居るべし(最敬禮とは小笠原流の呼ぶ真  
の禮にして其仕方は次に審らるなり赤照あれ)此の時  
案内者を前へ五六歩出で、右の方即ち案内する人を  
左りに見て両手をつき坐して真の禮を行ひ然る上に  
て両手をつきたるまゝ頭を軽く少しく持ち上げて案  
内さるゝものゝ方を顧み是の礼は何某と姓を呼ひ始  
めたるときは案内さるゝ者は下たる頭を少しく上げて  
下り貴人の類を見上げ「何某」なりと姓名を照介し了り

次に茶碗を直し  
て茶入の蓋を取  
り蓋をなして其  
のまゝ元の處に  
戻すべし此の間  
始終茶入を左の  
手に持ち居るな  
るべしと心得べ  
し  
斯くなさは右の  
手にて柄杓を把  
りあげ傾し搦指

たるるとき案内さるゝ者は突き居たる両手を少しく前  
へ出し其より頭を下げて丁寧に一禮なし中腰になり  
て敷居を越へ上座へ進み一間ほどを隔て斜に度すべ  
し(此の時敷物を進められなは一應は録返するも可な  
りされは再三録返するは無禮なるを以て其の時は一  
禮なしにて敷く方及びつて禮に叶ふものなり  
○貴入を案内するときはの禮  
貴人を案内するときは両手を両膝につき少しく体を  
あてめて貴人より右へ斜に寄りて前へ立ち(決して貴  
人の真前へ立ちなれば大の非禮なり)時々貴人の方を  
振り向きて善かに歩みゆくべし而して案内すべき座  
敷へ来たたりなを禮に依て障子襖を開き(障子襖の開き

を上になして持  
つべし而して湯  
を汲み透當に茶  
碗にはぎて入れ  
べし研れども若  
し湯多分に柄杓  
の中に運入て餘  
りたる時は柄杓  
の中の湯を釜の  
中へあけてとる  
し而して柄杓は  
其のまま釜にか

方は次第に審りなり赤照あれ一禮なして案内すべし  
貴人座敷へ通りなほ再び一禮なして踊る後壽かに支  
ち去るべし

○度禮

度禮とは座して拜する礼即ち俗に云ふ礼拜の事にし  
て日用主客應接の間に於て専ら行なはるゝ必用なる  
禮なり而して相手の貴賤に由り三つの別あり小笠原  
流に依れば三つのは謀を呼んで真行草とは云ふ名稱  
を下せり  
真行草とは文字の真行草の如く正格より順次略しゆ  
くの禮にして真を第一の敬禮とし行は其の次ぎ草は  
下輩に對するときは禮の仕方を見するなり左の如し

けおきさて茶釜  
を右の手に持ち  
左にて茶碗を支  
へ懸すべし  
以上は諸茶點茶  
式の概略なり種  
種服飾さば茶  
巾さば茶の式  
あれども其は説  
き明すも後雜に  
して實地につま  
傳習せしんは理

〔甲〕 真の礼 (最敬拜)

真の禮即ち最敬拜にして貴人に對する時の禮なり真  
の礼とは左右の人指々を人指々をを指指と梅指とを  
互ひに突合して掌を腰につけ而して其の指と指とを  
突合したる處へ觸れく頭に下げ体を少しく後へ  
下ぐる趣味に寫して軽く先の体を見上る意あるべし

〔乙〕 行の禮 (敬拜)

行の禮即ち普通の禮にして公衆に對するときはの礼な  
り行の禮とは左右の人指々を人指々をを觸々に突合  
せ頭を指の近くまで下げて前を見する氣味になす  
べし

〔丙〕 草の禮 (略礼)

解し無ふものにあらざるを以て略しおきぬ

○ 儀茶の懸じ方

式の通に茶道具をならべたれば第一に柄杓を握りあげ之を左の手に移して右にて蓋置を握り載り右の方に置き

第一の圖座三種の儀の圖



草の禮即ち略禮にして自今より下輩に對し行のふ禮なり草の禮とは説く如く最も略禮にして唯だ左右の手を少しく前へ差し出し斜になす氣味にて掌を強につけ而して両手の間を一天ほどあげ頭を僅かに下て先方の体を軽く眺むる意あるべし

委しくは上圖に依り見らるべし上圖は三種を示せるものなり

るれば右の手に左の手の柄杓を移し直に柄杓を釜にあげべし

新く準備なし了りたれば懸者は先づ窓に對し一挨拶あるべし挨拶了りたは爐に向かひで爐を裁り前との間に茶入と茶碗とを直

〔注意〕方令泰西の文藝輸入してより以來貴賤の別なく一般に洋服行なはれて純中帽子に至りては殆ど之を絞らざるものなく否な絞らざれば何か物ならぬ心地する様な次第どころはなりたるを以て以上説き来りし小笠原流の禮式は帽子なぞを絞らざるやきの禮式ゆへ方令洋世俗には透せずと思慮する方我は此れなしとせす然れども決して帽子の有無に關せざるもなり説き来たる禮式に依れる方令の紳世と雖ども今に禮式に透ふものなり如何となれば帽子は素と是れ然す絞り居るものにあらずりて人に面するとき又は室内に於る時には必ず脱し居ればなり故に以上述べたる禮式にて決して透せざる事は斷じて是れなき

すべし  
 但し此の時の茶  
 入は「しふく」を  
 て袋に入あるも  
 のと知らるべし  
 乃で先づ右の手  
 にて「しふく」を  
 裁前に直し左の  
 手「しふく」を  
 折へ右の手にて  
 其の緒をとぎ而  
 て両手にて袋よ

なり漬者清ふ會得されたり  
 但し少し異なる點あり其は左様に於る時の事なり  
 此の場合には時によると帽子を持ちたるまゝ襷を行  
 はざるを辨ざることもあり故に殊更に起居の札の筋に  
 出さず順序を変へて此に出し以て左様の式を説くこ  
 ととなり置きたり

○左様

左様とは立ちたるまゝにて襷をなすことを云ふもの  
 にして途上人に逢ひたるとき花す如きの襷は矢張左  
 様なり然り而して左様にも亦た三つのは襷あり左  
 の如し

○最致様 (貴人に對するさまの札)

り茶入を取り出  
 し之を下に置き  
 て袋を腰に直す  
 亦又は折釘にか  
 け襷茶の時の如  
 く服紗さほきた  
 して茶入を左手  
 に持ちつゝ拭ふ  
 べし  
 茶入を拭ひ了り  
 又は茶入を元の  
 處に戻して右の

最致様即ち貴人に對して左札を行のふ時には先づ帽  
 子を脱ぎて之を左の腰の下に軽く抱へ而して右の手  
 を膝頭まで下げ掌を平に膝にあてゝ足を少しも動か  
 さず頭と体を前へかむべし

〔乙〕致札 (公衆に對するさまの襷)

致札即ち公衆に對して行ふさまの襷は先づ帽子を脱  
 ぎて帽子の縁を左の手にて持ち之を自然に下げ而して  
 右の手も亦た自然に下げて股の外側につけ(但し掌を  
 前にすべし)頭を少し下ぐればよるし

丙) 界札 (下衆に對し施す様)

界様即ち下衆に對し行ふさまの襷は無難作なさまの  
 にして先づ帽子を脱ぎ之を左の手に持ちて足少し

手にて茶碗を把り上げ左に移し右にて服鈔を把り之を拭ふて右に移し茶入の上に置くべし新なきは次に茶釜を載り前に直して茶碗を合じく茶釜を差へて前に直し茶碗の中なる茶巾を右

らつふけは其にてよるし  
○女子の立礼  
女子が立禮を行つ場合には和服なれば前々より脱く如く両手を正しく両膝につけ体と共に頭を下げて禮を爲すものなれども洋服なぞの時は少しく異なるものなり女子帽子を附くるときは其を腕をさす式なれば取て帽子を腕に及はず唯だ両手を膝に當て体を頭と共に前へ屈すれば其にてよるし是れ男子の立禮と少しく異なる點なり  
次に男女とも立禮の際頭を下ぐる度は別に一定せずと雖ども上下尊卑の度に應じて任意に下ぐるべし是れ最も注意し置れたる事なり

の手に把り之を蓋置の上にあけ更に右の手にて柄杓を取りあげ左にて釜の蓋を取り柄杓にて湯を吸み茶碗の中へ入れ柄杓を其まゝ俯けに釜にうけて釜蓋を右の手に取り蓋置の上に載せ其よ

第三章 言語及火服禮  
○一般言語づかひ  
言語は最も大切なるものにして詞の遠方に依て大に人より尊はるゝ事もあり又大に賤まるゝ事もあるは詞の遠ひ方より最も注意すべき事なり取分女子にありては禮更とす  
先づ詞は男女の別なく高低緩急なきや即ち靜らに落附てキツパリ判然たり言をよるしとす野卑なる俗語流行語戯語などは決して他人の前にて遠らべからず兎角詞と云ふものは其の平生に於て遠ひ居る詞のみ慣となりて口より出るべき可き當はなれば平生慎みて戯語及卑猥なる詞を遠はぬやうは注意すべし入に依りて



り右の手にて茶  
釜を取りあげ茶  
碗に左の手を添  
へかき煮し湯を  
沸水の中へあけ  
て蓋置の上なる  
茶巾を取り茶碗  
をぬぐひ又元  
の處に置き而し  
て茶入を取りあ  
げ左の手に移し  
右の手にて茶杓

は他人が話せし名話を自分考へし話の及りに人に  
語る人あれども其は火の無様にして必ず其の場合に  
は雅くが斯く云れしと云て語り強す及りにすべし次  
に女生は天賦優美を以て其本色をなすものゆへ男子  
よりは一層言葉の遠ひ方に注意すべし故に無暗に人  
と話すの際身は熟知なり學者なりと云ん併りに漢  
語なぞを交へて話なすは甚だ礼に欠くるものなり斯  
る事は女生の最も慎むべき事とす  
○他人と話しをするときは心の  
入る話するときには先づ先方の話の了るを待て踊る  
後に始めて話を初むべし来た人が話の了らざる中に早  
合點して裁む話をなすべからず

を持ちつゝ茶入  
の蓋を取り之を  
右腕に置きて茶  
を三匙ほど茶碗  
に入れ元の通り  
蓋をなして下に  
れき其より透宜  
に茶碗へ湯をろ  
くぎて茶釜にて  
廻し煮て了るべ  
し

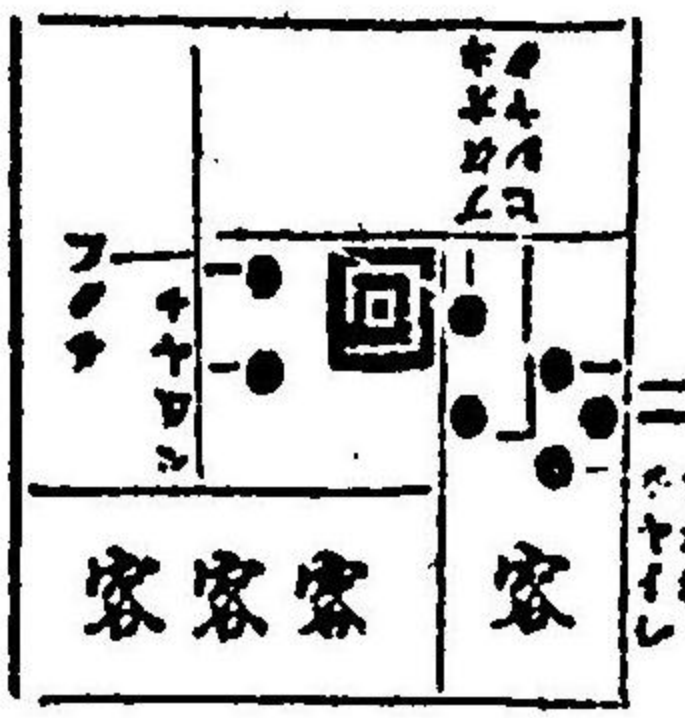
次に他人の席にて話なすときは自分併り嘆々として話  
をなす勿れ一同の人の心地を損して不無なればなり  
其かち人が話なし居る中間に口を出して人の話を妨  
たぐる及りの事をなす勿れ  
又た貴人より話かけられたるときには十分其の話を  
聞き了りて後少しく頭を下げ両手をついて答へし若  
し多人数の席にて貴人より一同へ話を仕掛られし場  
合には先づ上席のものに譲りて無暗に先へ話出す勿  
れ併し名指にて話ありしときは一同へ挨拶して然る  
後に話を初むべし  
○他人の話を聞くときは  
他人の話を聞くときは両手を膝に置き頭を少しく

の大概なり猶ほ委しくは師につき修めらるべし  
○茶具の排列

茶具の排列方は仲々に複雑なるものにして本膳手逆膳手或は風爐又は本爐などにて各々多少の委化あるものなり

垂れて聽くべし決して等閑に聞き流すと云ふ風をなす勿れ假令身は十分心掛居る活と雖ども念を入れて十分聽くべし活半に頭をチヨロク下げて合點は大の無禮にして殊更に注意すべし  
又た大勢で話を聞居る場合も大勢の中一人に話のある場合も僅しんで聽き居るべし自今に話をされて居る場合でないからと云ふて側見をするやうな事あるは非常に無禮なるものなり  
○貴人へ對し話をなすときの禮  
貴人へ對し話をする時は座の左りによりて正しく座り両手の指と指とを絡んど觸合ふ氣味に横に並べて頭を少しく下げ貴人の顔を見上げて話し始め其より腹

れは略し置きたれども左圖は其の中の爐のときの方を一寸と添せるものなり  
○四邊半本膳手



々頭を下げて貴人の胸の邊を眺むるを度として話をすべし



併れども貴人の席に若し尚ほ貴人あるときは斷じて話を和るをよるしとす  
貴人に場事を言上するときは亦た公ひきものなり  
○一般眼禮の心得  
眼禮は十分正しくなさ

○喫茶法

茶を喫む式にも一定の方ありて飲廻をなすのそ飲廻せざるものそあり飲廻すべきは燻茶にありて燻茶には飲み廻しなきものなり

さて其の飲廻の式は主人先づ前

るべあらず湯を觀るさまには正しく觀るべし入る相向ひて先の顔が無暗にジロく見ら勿れ又人の家に赴きまては座敷中をギロく見廻すなれ人の話を聞き居る場合には相手の手似其の他派に目を止むべし横眼で人を眺たり睥睨にみたりなすは實に此の上もなき無禮至極の事なれば注意すべし

第四章 態度

○態度

態度即ち容子は男女に係はらず整然と正しくなさまれば人の笑ひを招くのみならず大いに禮に欠くる次第なるを以て常に男女は別なく衣紋を正しふし髪を無く揃すり衣服の折目を正しくなすやう心掛べし殊

に迷べたる點茶

式に依りて茶を點じ服紗と茶椀とを並べて差し出したは上客とて一番上に座し居る客は先づ自分の座を少しく進めて右の手に茶椀を托り左を底に添へて裁前位置を其よ

に女生にありては頭髪を正しふ結て假令一本の毛たりとも乱し置ぬやうなすべし

○衣服の着やう

既に迷ふる如く衣服の折目揃はざるか衣服の點あるかは實に禮に欠くる次第なるを以て衣服を着るに先だち髪おれは之を伸し折目正しうらざる處おれは之を直し而して後襟そりを無く揃へて衣紋を正しく合し着るべし

○衣服を着せる禮

入に衣服を着せるには先づ両手にて両袖口へ小指を入れ小指と無名指とで袖口を揃ふ是より入指を細指で懸襟の處を揃みて着せべし是れ正式なり又た襟

り合しく右の手  
に服紗を取りて  
之を左の手の掌  
にりけりして之  
を蒸碗と並べて  
腕にたくべし此  
の時家一同を徳  
禮とて一同にて  
主人に挨拶ある  
べし○袴了らば  
上客は右手にて  
服紗を取りあげ

のみを以て着するも妨げなければ着る人可少しく着  
にくきを以て前の方に従ふべし  
○衣類を疊んで積み様  
衣類を疊むに先だち糸く懸あれば之を伸し而して番  
通の疊み方に依りて丁寧に縫目々々を合し了之を疊  
み然る上にて蓋へ積なり其の積方は蓋を横になして  
下前を上になす糸り襟の處を右の手に持ち左の手に  
袖を持って之を二つに折り両手に了頂くが如く持ち其  
から斜め左の方より蓋へ疊すべし突りて正面よ  
り直線に載する勿れ  
第五章 席上に於るの禮  
○應接の禮

之を左の掌に  
のせて右手にて  
服紗を抜き右の  
手にて蒸碗を取  
（但し襷指を縁  
にかけ四指にて  
底を支へ取るた  
り）之を服紗の  
上に載せ其より  
持たる所を裁前  
になして右の手  
をたつる氣味に

應接と云ふ事は人と挨拶する事にて談話敬禮等皆な  
是れ應接の中なりされども談話敬禮等の事は尽く前  
章に於て述べたるを以て前章に依りて知られしなるべ  
し故に此には一般挨拶の仕方のみ述べし  
凡て人と挨拶をなすには何事によらず禮儀辞退と云  
ふ事を冠隠せざるべからず即ち自分を後にし人を先  
にゐると云ふ事が肝要なり然りと雖ども余り辞退は  
過ぎて度を失なへは及つて禮に欠くるの怨あるを以  
て度即ち程になさざるべからず程は先づ二度ぐらひ  
辞退して三度にならば辞退するに及はず  
何じそに由らず入可見せし品や又は話し聞かされた  
る事に就て其の善悪是非の評をなす勿れ場合に依れ

なり静かに一口  
 のむべし此の時  
 主人は茶加減い  
 かゞやと問ふべ  
 し然る時は上加  
 減なりと答へて  
 其より次けて二  
 三口即ち合して  
 三口半のみて其  
 の喫口を指々を  
 中にて拭ひ其の  
 手を懐依にてふ

は禮を欠くのみならず場  
 にはなり次に人前にて耳  
 貴人を招するときは自分  
 進ひ座敷へ案内すべし公  
 立ち出て出進へはよろし  
 (送り出すときも貴人なれば  
 の間まで送り出れば可なり  
 ○貴人の座席に入るの禮  
 貴人の座席に入るときは  
 に座して一禮し其より兩  
 眞の拜を爲し(眞の拜と前  
 りて座敷の中へ進み入り  
 三十一

き然る後呑みたる  
 る口を右に廻し  
 て次の窓に差し  
 出し同様に先  
 へこの挨拶をな  
 すべし  
 次の窓は之を兩  
 手にて受け取り  
 三口半に喫みて  
 前の如く食指を  
 中にして拭ひ吞  
 口を右にして次

○扇子のつかひ方  
 扇子は四季共に勢う可  
 具にあらず人の前に出  
 第三圖



右の膝腕に置べし  
 遠ふには三間程ひ  
 らき体を少しく腕  
 に向け片手を突て  
 遠ふべし全体を開  
 き遠ふは無禮なり  
 又貴人の前にては  
 遠ふなから大の無  
 禮なり殊更婦人は  
 三十一

坐の家に渡すべし  
 如くにして末座の家に廻るなり  
 末座の客は之を受け  
 受けて公じく三口半に悉く茶を喫み干して公じく指にて拭ひ之を服紗と製々に坐を運めて主人の此方へ差し出

極めて静かに遠よをよるしとす  
 ○煙草の吸ひ方  
 煙草は餘り人前にて吸ぬ可より(但し同輩なれば差支なし)女生に在りては最も慎みて吸ぬ可なりとす  
 吸はん可せは一種して然る後吸ふべし吸ふには吸蓋可火蓋の中にて動かすまで吸ふなれ先づ半吸ふて唾壺の中へ静かに掌を受けて吞せぬ可なり叩き落すべし直接に叩きてカチ／＼なぞと音さすは無禮なり  
 ○茶の呑み方  
 湯茶煎茶に依りて呑み方異なるものにして其の委しきは茶の湯に譲るべけれども先づ通常人の家にて呑むは煎茶なれば其の呑み方を示すべし先づ茶碗を

すべし  
 さて右迷ふる如く三口半づくに飲み廻すものゆへ先づ総体の茶を四分して其の一分を喫む心地なかるべあらす末座の客に餘り少なきも失禮又た多きに過るも失禮なれば豫じ

右の手に取り左の手を壺になす襟に添て押し載し無暗に吹くなかれ大無禮なり  
 ○鼻のかみ方  
 鼻をかむに一定の禮あり貴人の前にてかむ勿れ故に若し鼻虫たきときは挨拶して下座に下りかむべし公衆知乙の前にてを鼻を屈めて下座の方を向き靜るに三切後にかむべし一度に「フ」を云つて「ホ」切ふは無禮なり慎むべし  
 ○障子襪の開用方  
 座敷内の襪を開んとするには襪の傍へ歩み寄りて右の足を少しく後へ引く左を右に穿て両膝をつき右の

あはれ心掛ふか  
るべらず  
次に一つ茶碗に  
て飲み廻す事申  
へおの呑口の次  
坐の人へ向はぬ  
やうおの呑口を  
避けて差し出す  
心掛なかるべか  
らず是れ最も注  
意すべき事なり  
故に茶席にては

方へ開んと思は左の手を環にかけ右の手を膝に置く  
べし(左なれば支對にす)環へ手のあけ方は拇指の下に  
なるやう為べし新なして毒かに身体を襖で隠し三四  
寸あけなは手をかへ左を環にかけ居れば右へ入  
分開き了りたれば下座の足より前へ進めて座敷に入  
り其より左へ廻りて開しときもの如く着坐なし開しと  
まご公じ様に手をあけて用むるべし決して開閉とも  
一度にせず説く如く中途にて手をかへ二度に開閉な  
すべし此れ襖の式なればなり  
障子を開閉なすには襖と大差なければも障子のとき  
は環なきゆへ腰抜の様に手をかけ開閉なすべし人を  
室内する場合には両膝茂つくには及はず片膝つけは

ト客と末客とが  
一番禮式を心掛  
ねはならざるも  
のなり

○茶を誂する

とき式

茶を誂するの式  
は主人が茶碗の  
中へ湯をつきて  
建水におけたる  
とき上客は一寸  
すしみておろさ

其にてよるし但し手の掛袷等は異なる事なり

○目上の人の前にて事務を執る方

目上の前にて事務を執る場合には目上の人の席より  
一間ほど手前に於て両膝をつき軽く一禮して其のま  
し側へこぢり寄り然る後事務を執るべし立ち去るこ  
きも公じく一間ほど後までこぢり下りて立ち上るべ  
し傍まで歩み行きたり傍にて立ちたり為は無禮なり

○人の寢處へ入るとき式

用事の爲に人の寢處へ入らんとするときは先づ襖障  
子の外に両膝をつきて毒かふ呼吸起し然る後入るべ  
し起るも或可毒かにすべし急騰せるおらと云つて大  
聲に起す勿れ不敬なり

め下されたりと云ふべし然るもきは主人を茶を欠むるものを知るべし又茶を下げたりしと清もよるし薄茶を許するもきは主人の茶碗の中へ湯を入きて未は建水へあけざる中に茶巾

を把るを度として早更十分に候と上家は挨拶なすべし  
 (一) 茶會を催す  
 とき心のほ  
 茶會を催さんと  
 歌をば主人は先づ使にても書面にてもよ格ひき申へ前より幾日は茶會を催す

茶 四 圖



茶を進むるには臺に茶碗を載せ両手を仰けにして指で臺の縁を支へ四指で臺を受け客の前へ行は右足を

すときは家の右へ置と心得べし

を足下  
 び跪づい  
 て頭を下  
 げ差し出  
 すべし若  
 し臺ぐる  
 み差し出

○菓子を進め方

〔甲〕菓子

菓子皿か菓子鉢に入れたるまゝ差し出すときは箸の附けある方を客の方に向けて客より一尺乃至七八寸手前に置くべし若し菓子鉢でなく盆の上へ俵なぞを敷ゐて差出すときは客の側へ持ちゆきて其のまゝ置くべし

〔乙〕水菓子

水菓子の出し方は少しく優雅なるものにして出す菓物に依りて多少異なるものなりされは此には最も人々が客に出す物のみを死すべし梨を盛さんとする湯合には頭の方より刺きゆきて之を四に縦に割り杖を

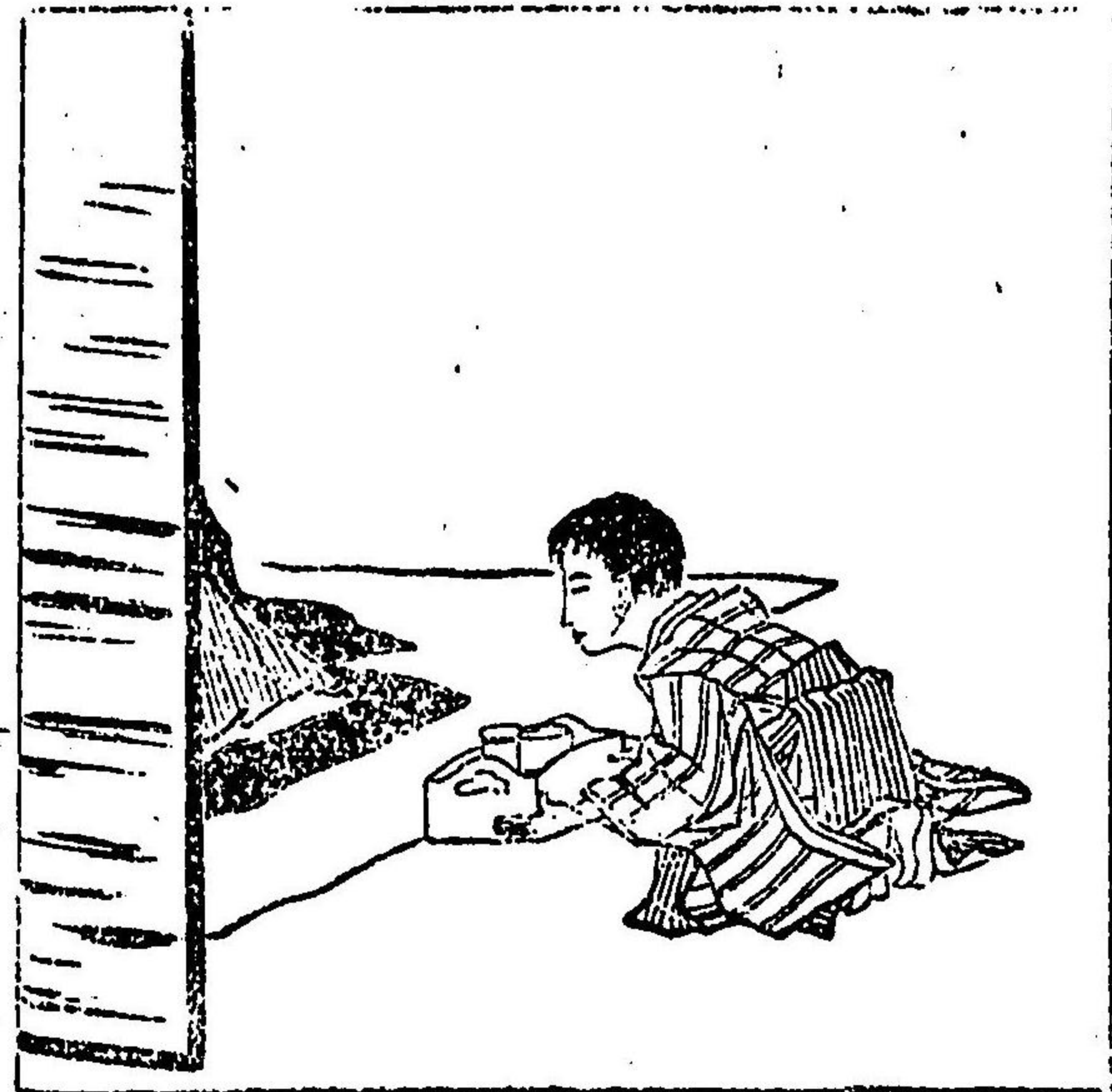


つき御来車下さ  
 れたしと案内状  
 を發すべしきて  
 當日とまりたれ  
 ば茶席の整頓は  
 素より其他待合  
 疏路洗水鉢等凡  
 て備かに掃蕪な  
 し置きて客來  
 るを待つべし  
 ○招かれたる  
 客の心得

は其のまゝ附け置きて進むべし瓜西瓜等の場は其の  
 皮を剥き後に二つに割りて又た横に大小に準じて透  
 宜に割り而して進むべし客相を皮をつけたるまゝ輪  
 切になして進むべし  
 ○煙草盆の進め方  
 煙草盆を客に進むるときは取手の附きたるもの取手  
 の附かざるもの側に依りて多少遠ふと雖ども火入を  
 客の左の方に唾壺を右の方にたすやう心掛べて而し  
 て取手なき煙草盆のときは右の手にて片縁の下は處  
 を受け左の手にて片方の縁を支へて持ち出し取手の  
 附きあざるものなれば片手で取手を持ち片手で縁を支  
 へて持ち出すべし次に客前にゆきたれば先づ煙草盆

茶會の案内を受  
 けたるときは先  
 づ前日までに伺  
 候するか又は手  
 紙にて有難と挨拶  
 書を申述ぶべし  
 さて當日となり  
 ければ各々着上  
 なして一同の揃  
 を待ち主人に揃  
 ひたる旨を報じ  
 て主人の指示に

第五圖



を下に置き其より兩膝を突四本指と拇指で兩縁を支  
 へ向へ押して差出べし

差出は二三歩下り  
 て一禮し去るなり  
 ○火鉢の進め方  
 火鉢を進むるに室内  
 を暖め置く火鉢は前  
 以て差し出し置るよ  
 りし此れ客の來たる  
 時分に都合よく室内  
 が暖まり居ればなり  
 又九時に依りては

後ハ茶席に入る  
 べし  
 茶席に入れば  
 上客にも順々に  
 挨拶なしと坐落  
 懸轡等を見互  
 ひに相當の挨拶  
 あるべし  
 以上は茶の湯心  
 得の次要なり委  
 しくは所に純き  
 習るべし

客の来りたる後に差出す事あり然るときは二人にて  
 火鉢を持ち出し上座へ置くべし  
 手あぶり火鉢を客に差し出すには客の右の方になる  
 欠りに火箸を添へ其より火の十分念こり切らぬ方が  
 客の前になる欠りなりして両手にて之を持ち客の前へ  
 進みたれば兩膝をつきて客の右の方七八寸隔た望た  
 る處に置き三足ほど下がりにて立ち上りかへるべし  
 ○扇子及火團扇の類差出し様  
 客に扇子又は火團扇の類を差し出すに先づ扇子  
 坐らば要の方を團扇なれば柄の方を向にして之を右  
 の掌にのせ左の手を軽く添へて客の前に持ち来り兩  
 膝をつき頭を下げて恭しく差し出すべし

第二章

諸禮式補遺

本意は下様本文  
 中に未だ見えて  
 不迷し能はぬ者  
 を補遺として此  
 に記せしものな  
 りと知れたし  
 ○書紙を認む  
 此の様式  
 凡そ男女に係は  
 らず手紙は丁寧

併し先づ餘程の貴人にてあらば掌へ服紗の類をひき  
 て差し出すものことす  
 ○物を扇子に載せて進む方  
 扇子に物を載せて入へ差出すには先づ扇子を全体に  
 用き右の指にて要の處を持ち持方は概指を上に出し  
 て残る四本の指にて下より支へ而して左の手にて親  
 指を持ち扇子を少しく斜になしてひさまづき差し  
 すべし若し上に載する品物重きときは左の手にて下  
 より之を支へ差し出すべし  
 ○小刀の進め方  
 小刀其の他凡て刃物の類を人に進むるには刃の處を  
 下に向け柄の方を先の方に向て差し出すべし

に軟かく認むる  
を宜しとす殊に  
女生に在りては  
種更滑かふ認む  
るの肝要なり  
目上の入へ贈る  
手紙は十分念を  
入れて丁寧と言  
葉を正して認む  
べし墨色は餘り  
濃からぬを種と  
なすさりやて無

○硯及次新紙の進め方  
硯を人に差し出すには箱あればよるしけれど若し  
硯箱なきときは硯を臺に載せて差し出すやりにす  
べし決して硯のまゝにて差し出す勿れ  
さて硯を差し出すは先づ第一に箱の中をぬく改  
ためて清潔になし硯池へ水を入れて墨をすり其より  
蓋をなし硯池の處を自分の前になるやう右の手を  
下へ入れて箱を支へ左の手にて動本ぬやうに箱の左  
をおさへ家の前に進み少しく斜めに家の右の方に硯  
箱を置くべし硯箱を置き蓋は両手で蓋を取りて之を  
箱の右に付けに置き一程おして三足ほど下り立ち上  
りて返くべしこれを此の時客若し挨拶あれば両手に

暗に薄きは襖に  
くゝて失禮なり  
次に手紙の書き  
初は三四寸あげ  
て書べし上下も  
少しづゝあくる  
およろし終の處  
も亦た二三寸あ  
けて白紙になし  
置くべし  
又九親類其他同  
輩に送くる手紙

て再び蓋を取り上げなすべし  
新紙を進むるには硯箱の上へ載せ落ちざるやう左の  
手にて軽く支へ進むべし  
○書物の進め方  
書物を進むるには先づ字頭を裁り前に寫し其より之  
を文臺か或は盆服紗に載せ両手にて持ち差し出すべ  
し書物若し幾冊もあるときはつより二三順次に揃  
へ買きて差し出すべし決して書物其のまゝで差し出  
す勿れ是れ無禮なまはなり  
○手紙の類を進む方  
手紙の類を進むるはて書籍の時如く字頭即ち名宛  
の上を裁り方に向ける手にて中程の處を裏より支

ことども文殊無  
 様に渡らぬやう  
 注意すべしざり  
 ことて餘り尊次  
 ひ違ぐるは人を  
 眞慮にしれやう  
 にあたりて及つ  
 て先方の氣を損  
 するの恐あれば  
 程ころ肝心なり  
 文中に殘さたる  
 文字あるときは

へて解になし名宛を向へ見せて下の處を左りの手に  
 て受けに氣味にまじし差し出すべし  
 第 六 圖



○墨のすり方  
 客の前へ硯箱を持ち出した  
 るとき客若し墨をすり呉れ  
 よと挨拶あれば直に左るべ  
 し其方は硯箱を手前へ直し  
 七分目ほどに水をさうゝぎ静  
 にのゝ字なりに摺るべし摺  
 り了りなは墨を手前へ置ま  
 て筆を取り筆の尖を墨につ  
 ち浸けて墨をその處へ直し

必ず一行の中へ  
 書き了るやうな  
 すべし後の行へ  
 跨るやうな事あ  
 りては先方にて  
 種みにくさゆへ  
 慎むべきなり  
 祝言其他祝言の  
 手紙を認むるに  
 は唇言葉は無縁  
 慎むべければ必  
 ず返すゝもて

硯箱を以前の位置になして客に進むべし

○軸場巻場の進め方

軸場及び巻場の類を客に進むるときは巻きある紐の  
 處を左の掌に載せ紐の結び目を我が前になして軸の  
 落ちやうなやう右手にて端を軽く支へ客前に至りなは  
 ひやまずきて右手をつき左手ふ載せたるまゝ捧げて  
 差し出すべし

○基盤の進め方

基盤を入に進むには重きものゆへ先づ二人にて持  
 ち出すをよるしとす既に持ち出したは一人を返さ残  
 る一人は基盤を腰の目と糸く揃ふやうに置き其から  
 両手を基盤の両縁に當て一様し返くべし基盤を締め

り莫々ともとか  
 の句は用ひぬを  
 よろしとす又た  
 祝事の手紙を認  
 むるには紙をこ  
 枚かさねて墨を  
 濃くして多紙に  
 認むる可祝事の  
 手紙を書く程な  
 りとす  
 其らら手紙には  
 つ定の前言葉あ

第七圖



に盥の上へ並べ置べし  
 ○先洗水の進め方  
 盥の中へ水酌を入れ両手にて盥の縁を持ちつまむ氣  
 味にて(客の前に置  
 き右の手にて水酌の  
 柄を取り左の掌にて  
 底を撃つ受け兩腕を  
 つき客が盥の中へ手  
 を差し出すを見て毒  
 ろに客の手より三四  
 寸はなれて上より注  
 ぎかくべし

りも片ゆへ必ず  
 前言葉を前へ書  
 きて其から先方  
 の事か乃至云ひ  
 送るべき用向に  
 移るべし決して  
 自分の事を先へ  
 書く勿れ  
 手紙の前言葉と  
 は謹啓とか前略  
 とかを云ふなり  
 次に贈り物を手

第七章 受渡の禮

○鎌令書受渡の禮

鎌令書或は免狀等凡て尊長者より授け渡さるゝとき  
 は先づ両手を兩腕に直線に垂れ端書と正面を向きて  
 心持頭を下ぐる氣味にて渡さるゝ人の前まで膝ゐに  
 歩みゆき乙三天手前の處にて跪つて一禮なして両手  
 を突き居るべし若し又た洋服等にて渡さるゝ人卓子  
 等を控居られたは其の時は立ちたるまゝ両手を膝頭  
 にあつ頭を下り居るべし  
 頭て渡さるゝ時には先づ膝かに頭を上げ左は手を作  
 けになして之が受け右の手を縁に添へて押し載せ三  
 天ほど其のまゝ後へ下りて右の手をつまみ一禮志て返

紙の中へ書き添  
ゆるには目録を  
死るす如く書す  
べし其書き方は  
飲食場を贈るた  
らは先づ精進場  
より先座書くべ  
し若し假に煮と  
酒を贈るとすれ  
は酒を先へ書き  
て煮を後に死る  
す可札なり

くべし支て受け取る時は公じく左手に受取右手を添  
へ三天ほど下り右手を膝頭にあて一札なして返せ  
なり  
渡すに右の手にて取り上げ左の手にて持ちかへ字頭  
を裁が前になして幕かき差支出すべし  
○書状受渡方  
書状の渡し方は書状進め方の如くせはよるし其の受  
方は辞令書の類を受取る大差なければ略す  
○品物の受方  
何物に限らず凡て目上の者より物品を受くるときは  
決して直に受くべからず必ず先づ一札なして然る後  
両手にて受くべし取令知已交達の間柄と雖ども片手

○紙包物の包  
方と水引の  
りけ方

凡て何物に限ら  
ず人に進物にせ  
んとするものは  
器に入べき物を  
除くの外は紙に  
て包むべし  
其包方少さきも  
のなれば紙を二  
つに折りて紙の

にては受く勿れ非札なり

第八章 人の家へ招かれたる時の諸札

○家の心算

人より来れよと招かれたるときは其の知の刻限通り  
遅速なきより参着すべし既に人の家へ参りたれを先  
づ床の飾物、花、軸等につまき一々主人に挨拶なすべし次  
に主人より進められたる品は辞返せずして程よく食  
ふべし無暗に辞返して食はざるは失敬なり

○着坐の札

招ぶれゆきて席に通りなは直に坐敷へ入るべからず  
先づ敷居の外にて挨拶なし然る後入るべし既に坐敷  
へ通りなは決して上席の方へ坐する勿れ主人進めな

重なりたる方を  
表へ出して上ま  
へそなまべし若  
湯大にして一枚  
の紙に包みかぬ  
るときは二枚合  
して其の合せ目  
を下になし包む  
べし  
包紙は何を用ゆ  
るも妨げなきや  
うなれども先づ

は先づ一度は辭返り再度進めらるれば其時は挨拶し  
て坐に就くべしされども床を着にして坐する勿れ又  
た多人数の時とつ公の人々へ其々挨拶なして坐に就  
くべし是れ着坐の礼なり  
○相伴に招かれたる時の礼  
相伴を受けたる時は必ず正客より先へ行き居るべし  
(正客とは其時招き来る本客なり)是れ正客として待り  
置くは無礼なるを以てなり先づ座に通れば相伴の事  
ゆへ正客より末に座するは素よりにして凡て出入と  
もつ々挨拶をなすべし又た食物等出でたるときは灰  
つて遠慮せず食ふべし遠慮を非礼なり  
○菓子のおひ方

奉書、松原、糊入  
の類を透宜に用  
ゆるを礼となす  
水引のかけ方は  
輪になりし方を  
上になりて尖の  
方を下に為すべ  
し而して赤き方  
は右へゆくもの  
即ち右にするも  
のど心構らるべ  
し墨き水引は梅

菓子をおひ方には先づ懐中より右の手にて紙を取り出  
し之を左手に持ちかへて左の方に置き右の手にて菓  
子盆より箸にて菓子をとり紙の上にて二つに割右手  
に残りし方より食し左手は方を紙の上に置くべし  
○餅の類のおひ方  
餅の類即ち痕のつく丸き物を食ふときは決して一口  
に食ひ切る勿れ其の痕三ヶ月形になりて見苦し儀で  
二口に食ひ切り食ふべし  
○膳の受方  
膳出でたるときは心持体を後へ下る氣味にして挨拶  
なすべし挨拶せざれば大の無禮なり  
○膳に向ひ様

の時の外は決して用ゆなかれ  
 ○新事に贈るべき品物  
 猪禮のときは先づ依 鯉魚、酒肴の類を用ゆべし  
 生産のときはよは産衣及物衣は酒肴をよるしとす  
 其の他凡て慶事を祝するに贈る

膳へ座するには真向ひに坐りて座すは悪し少しく左へ寄る心持にて座すべし(男女共然り)而して右の手にて飯椀の蓋を取り左の手にて又右の手にて汁椀の蓋を取り先の飯椀の蓋と相重ねて左の膳の脇に置べし必ず蓋を別々に置く勿れ笑はるゝなり  
 ○箸の取り方  
 箸を取るときは前に挨拶なして静かに取るべし持方は普通日常持つ通りにして食事をらは頭の方を右の膳縁へか



膳へ座するには真向ひに坐りて座すは悪し少しく左へ寄る心持にて座すべし(男女共然り)而して右の手にて飯椀の蓋を取り左の手にて又右の手にて汁椀の蓋を取り先の飯椀の蓋と相重ねて左の膳の脇に置べし必ず蓋を別々に置く勿れ笑はるゝなり  
 ○箸の取り方  
 箸を取るときは前に挨拶なして静かに取るべし持方は普通日常持つ通りにして食事をらは頭の方を右の膳縁へか

物は酒肴及火鉢飾を透當なりとす又九家祝などには陶器漆器等は世帯向の器具を贈ることあり  
 果中見舞には團扇水菓子砂糖等をよるしとす  
 寒中には菓子酒鮭卵の類を可とするなり

けるもの心持べし  
 第九章 諸物見舞の程  
 ○五花の見様  
 花瓶に挿したる五花を見るには先づ正しく床前へ歩みゆきて床より一疊を隔て、正しく座し扇子を裁が前に要を右にして横に置き其より両手をつき体を少しくかゝめて花のしん尖より漸々左りの枝を視る是より露もち水もり等を順々に眺め了りて裁可座に降り主人に花の事を賞賛べし  
 ○書畫の軸の見様  
 書畫の軸を見るには五花を見るに似て正しく床前より一疊を隔て、扇子を前に置き両手又は片手をつきて下

けるもの心持べし  
 第九章 諸物見舞の程  
 ○五花の見様  
 花瓶に挿したる五花を見るには先づ正しく床前へ歩みゆきて床より一疊を隔て、正しく座し扇子を裁が前に要を右にして横に置き其より両手をつき体を少しくかゝめて花のしん尖より漸々左りの枝を視る是より露もち水もり等を順々に眺め了りて裁可座に降り主人に花の事を賞賛べし  
 ○書畫の軸の見様  
 書畫の軸を見るには五花を見るに似て正しく床前より一疊を隔て、扇子を前に置き両手又は片手をつきて下



より上へと見あぐるべし若し鞆三ふく對なるときは  
真中より見るものと心辨べし而して右の方を最後に

第九圖



見了るものと知る  
べし又九夜間鞆を  
見るときは手燭を  
持て見るべし俱し  
手燭の柄の方を床  
に向ける可禮なり  
忘るゝ勿れ  
○着物の見様  
凡て入より着物を  
見せられたるとき

説く如く凡て進  
賜は其の贈るべ  
き目的又は時難  
に相當なしたる  
物を贈るが禮な  
りとす

○男女小供の  
心得

男女小供の中よ  
り常に禮儀正し  
くなり居るころ  
肝要なり爾すれ

は成人の後と雖  
ども子供の中に  
行ひ来りし禮節  
身に染み渡りて  
一舉一動皆禮節  
に透ふものゆへ  
何んでも小供の  
中より禮儀正し  
く為しむべし  
肝要なり故に父  
母たるものは常  
に我が子に云ひ

は先つ丁寧なして怒る後に静かに両手にて受  
取り笑と見了りて之を元の處に直し再び挨拶なして  
怒る後に賞賛べし如何に其の是非を評せよ云はるゝ  
も先つ乙度は謙遜すべし評せよ云はれざるに無暗  
に是非を評する勿れ無禮なればなり慎望べし

○書幅の讀み方

人より書幅を見せられて之を讀むときは先つ書表  
軸を見る時の如く両手又は片手をつき怒る後に静か  
に點讀すべし聲を發して讀むは無禮なり而して讀み  
了りなは丁寧な挨拶して始めて其の話をなすべし

○書籍の見方

人若し書籍を見せしむるに先つ一禮なし

聞かして禮節を  
守り行なはしむ  
るこそ父母たる  
ものゝ道ならぬ  
夢學問になすな  
かれ今左に日常  
常に修め守るべ  
き事を述べし  
先づ部屋にある  
ときは行儀正し  
く座すべし女子  
は少しく左の膝

て其より右手の掌を差し出して少しく頭を下げ之を  
受け越る後左の手を添へて引き寄せ左の掌へ之を載  
せ右の手にて初三枚ほどを開き見る而して又中程  
を見ひ最後に了を見て始の如く持ち返すべし

第十章 飲食の次第

○会事に關す一般の心得

会事に際して第一に身体を正しく座し居るも肝要に  
て会事中は決してギロク、と腹見なかなす勿れ又た  
口っぱいに物を入るゝ勿れ着にて梳髪茶碗の中をり  
き廻す勿れ又た会事中に鼻をふんだり、ふせたりなす  
勿れ又た会事中に体を動かしたり頭をかひたり或は  
話をなしたりするは大の無禮なり慎むべし

を上ぐる氣味に  
て右の膝へ寄せ  
かけ座すべし  
父母兄弟其の他  
凡て尊長者と活  
をなしたり又は  
物語なせなすと  
きは男女の別な  
く左の手を軽く  
突くべし  
朝は早く起て父  
母に挨拶なし夜

○臺に載せたる物の受け方

凡て何に限らず臺に載せたるものを受けるには両手  
を差し伸べて器の兩縁に手をおけ軽く目札して裁が  
方に受取べし此の際じ口く、と裁が居廻を眺めたり  
或は先の臺を見廻したりなすは大の無禮と心得べし  
女生に在りては種更なりと知るべし

○盃の受け方

盃を受けるには先づ右の手にて杯を持ち左の手にて  
臺の縁を持ちて受け取り其より直に杯と臺と左右に  
わけて臺を其のまゝ左の方へ置き其より右の手にて持  
し杯を左の掌に移し右の手を杯の縁へ軽く添へて前  
へ差し出し頭を少しく下ぐる氣味にて酒を受くべし

厨するときは赤  
 九核摺をすべし  
 手洗口ろゝぎな  
 どなすときは毒  
 ろにまじて決し  
 て手洗水などの  
 四方へ飛火散ら  
 ぬ火りに為すべ  
 し散らおすは無  
 札なり  
 食事の時は正し  
 く座するは勿論

第十圖



無く人に依るも杯を上へくと持ち上げて酒を誂す  
 る人あれば新は大の無禮なり若し酒を好まざるとき

は目にて酌人に知らす  
 べし其時は酌人も酒を  
 好まぬなりと知るべし  
 (一)飯の食ひ方  
 飯を喰ふには先づ前章  
 に示せる通りに飯椀の  
 蓋と汁椀の蓋とを取て  
 其より飯を二箸食て其  
 から汁に移るべし決し  
 て一箸飯を食て汁に移

にして食事中は  
 決して人と話な  
 せ仕たり又はギ  
 ロく人の類  
 を見廻したり四  
 方を見廻たりな  
 す勿れ急いで飯  
 を掻き込たりな  
 す勿れ又九肴は  
 かりムンヤく  
 と食ふなかれ箸  
 にて茶碗の膳の

〇勿れ必ず二箸食ひて汁に移ると心得べし  
 〇汁の吸ひ方  
 汁を吸ふに一定様式あり無禮にガブくと吸ふ勿れ  
 先づ汁を吸はんとするには音させぬ火う初めに汁の  
 みを吸ひ其れより實を食ふべし箸などで汁の中を決  
 して掻き廻すなられ大の無禮なり  
 〇廻り物の食ひ方  
 廻り物は膳の上にある諸種の肴の事に於て其の諸  
 種の肴を食ふに最初は決して我が好む物あるも食  
 ふ順序にあらざる限は食ふべからず其の食ひ方は先  
 つ飯と汁とを食して後に始るものにて第一に清進物  
 より食し其より又た飯や汁とを食し其より二の汁に

縁なぞ叩ひたり  
なす勿れ箸にて  
齒をほせたりな  
すなかれ茶碗の  
中へ香の物を入  
れて搔まわした  
りなすなかれ食  
茶了りて茶を飲  
み居る時に又た  
肴を取りて喰ふ  
たりなす勿れ  
以上は是れ皆な

移り又た飯を食し其より焼肴、猪口と順手に食ふべし  
新して一週食し了らば其の後は任意に好む物を食し  
て可なり併れども一度に二菜を食したり遠き處にあ  
るものを膳越えぞに食する勿れ無禮なり  
○雑煮の食ひ方  
男女ども雑煮を食するには椀を取り上げ手其のまゝ  
にて食すべし汁を吸ふときのみ箸を下に置きて両手  
にて椀を抱り吸ふべし是れ禮なり  
○肴の受け方  
人より肴を箸にはさみて差し出されたる時は両手を  
重ねて之を受け片手にて懐中より紙を取り出し(但し  
紙は折たるまゝにて)其の中へ肴を入れ食すべし

日常心掛けて子  
供の中より守り  
行のふべき禮節  
なりとす  
○屏風のたて  
方の事  
屏風を座敷へま  
つるには一定の  
式あり先つまべ  
き屏風の傾斜を  
ゆるく見定めて右  
座の方には上左

(菓子類にても入より挿まれて出されたる時は隔り  
と心得られるべし)  
○湯漬の食ひ方  
湯漬を食ふ時には先つ湯を八分目に入れられたしと  
清ふべし、さて其れより壽かに飯を箸にて崩し粉を著  
のつれざるものより菜を食し始め終りに香の湯を食  
ふべし而して終に受けたる湯にて箸をつけぬを宜し  
とす又た湯漬は成る丈音せぬやう壽かに食ふべし  
○麵類の食ひ方  
ろり麵等の類を食ふには先つ汁を下し置きつ箸と箸  
と、ろり麵を入れ湯より取り出し汁の中へ入れ而して  
汁を取り上げ食すべし決して汁の入湯を持たる儘り

座の方には下を  
向ひ合になして  
立てる可是れ式  
なり  
又九雷の屏風と  
其の屏風とより  
左は墨表と右は  
その屏風ととの  
を左には先づ  
墨表の方を先即  
ち上になすべし  
書と表なれば書

り趣を入れ食ふなれ大の趣なり  
○返盃のは様  
公衆なれば洗杯の水にうきぎて差し出すもよけれど  
も目上なれば盃を無くひたみ之を酌人ふ差し出すべ  
し酌人は杯を案に載せて之を貴人に差し出すべ志此  
のとき丁寧に両手をつきて一禮すべし是れ返杯の禮  
なり  
○蒲焼の食ひ方  
蒲焼其の他凡て串にさしたる物を食ふには先づ左の  
手にて盛りたる皿ぐるみ取り上げ而して左の親指に  
て串の根の處を押し右の手にて箸を取り其の中程よ  
り割きて串より抜き食ふべ志是れ一般串にさしたる

の方より上にな  
すべし  
○神を拜する  
の禮  
神を拜するには  
神前に跪つくか  
又九は正立して  
袂に二回乃至三  
回の葉子をなし  
而して後ち両手  
を正しく突つか  
又は両手を膝頭



湯を食ふ禮なり  
第十一圖

○飯碗の受け方  
更りの飯を受くるは右  
の手の親指で椀縁を確  
と持ち残る四指にて椀  
の底を支へ受けべし  
○汁碗の受け方  
更はりの汁碗を受くる  
には蓋をして来たら  
其のまゝ差し蓋を取る  
も矢はり其のまゝに  
なして而かして湯が

の處まで下げて  
丁寧ていねいに膝ひざ拜ひらなす  
べし

○佛ぶつを拜ひらする  
の禮らい

佛ぶつを拜ひらするには  
先まづつ佛ぶつ前まへに跪ひざまづつ  
きて左ひだりの手てに念ねん  
珠じゆを持もち右みぎの手て  
にて香かうを二に度たび乃な  
至いたる三さん度たび燒やして燃も  
る後のち兩りゆう手てに念ねん珠じゆ

に先まづつ兩りゆう手てで腕うでを兩りゆう方ほうより持もち整ととのくつ禮らいして親おや前まへ  
へ引ひき膝ひざの上うへへ載のせるべし

○汗あせ腕うでの渡わたし方かた

汗あせをかへん處ところに腕うでを差さし出だす時ときには先まづつ兩りゆう手てにて持も  
ち左ひだりの手てを放はなちて右みぎの手てのみにて持もちて膝ひざに手てぐさ  
みおき而なりして左ひだりの手てふて膝ひざの左ひだりにある蓋ふたを取とり蓋ふたし  
て再また火か兩りゆう手てにて持もち差さし出だすべし

○楊やう杖じやうのつゝるひ方かた

楊やう杖じやうは貴き人の前まへにてはつこふ勿なれつこふときは必かなず  
次つぎへ立たつて遠とほふべし公こう衆しゆうの前まへなれば遠とほふも妨さまたげなしと  
雖なども真ま正せい面めんにては遠とほふ勿なれ必かなず膝ひざを向むき袖そでにて口くち  
を匿かくすやうになしして遠とほふ可べ禮らいなりと知しるべし

をかけ拜ひらすべし

此こゝれ禮らいなり

○盲もう人に接せつす  
る時ときの心こゝろ儀ぎ

盲もう人に接せつするそ  
きは何なに事こともつ々  
急いそぐ會あいひなすや  
う云いひ聞きかすべ  
し決けつして急いそ加か減げん  
になす勿なれ  
又また九く男なん子し女にょ子しの  
盲もう人じんを誘い引ひよか

第十一章 客きやくを招まねくときときの諸しよ禮らい

○主しゆ人の心こゝろ儀ぎ

客きやくを招まねかんときは先まづつ豫よじめ其そのの仕し度どを考かへ置おく  
こゝ肝かん要やうなり程ほどとは室むろ内の掃きき床とこの向むかひ、生なま花はな  
掛か物ぶつ等らうに念ねんを入いれ置おく事ことなり馳ち走そう如何いかに珍う味みと雖など  
も室むろ内の装ま飾しやく整ととのめはざれば不ふ可かなり否いなな折せつ角かくの馳ち走そう  
も馳ち走そうにならざれば心こゝろ掛かべ志こゝろ次つぎに客きやく来きれはとて直ただち  
に膝ひざ部ぶなぞを考かへ置おく勿なれ先まづつ暫しばらくくは世よ間かん禮らいを考かへ置おく其そのよ  
り漸しだ々に出だすべし又また九く尚かうほ心こゝろ掛かべきは客きやくを饗あむる禮らいは  
の動どう作さくなり故ゆゑに前まへより十じゆ分ぶん給たまはに粗こ末まつを同どう敷し動どう作さくな  
き央なり云いひ聞きかし置おくべし俗しやく仕しの粗こ末まつは親おやの失しつ策さくと  
なりて客きやくよ無な禮らいなればなり

女子男子の育入

を誘引ふときは其手を持つことなかれ必ず其の右の袂を持つ様にすべし

○女子男子に

場を云ふの

心構

女子男子にも其の事を迷ふるときは必ず其の要

○俗仕の心構

俗仕に出べき者は男女の別なく客来の前に沐浴して身体を清潔にし正しく衣服を着して決して粗末な同敷動作なきやう丁寧に萬事を取り持つべし座敷に在て俗仕なすときは決して客人の顔を目くも見廻なかれ正しく座して両手を膝下置き糸く席上に注意すべし殊に女生にありて頭の髪なぞいぢりたるものゆへ必ず頭なぞいぢらぬより又九衣紋なぞを座敷にて直ほさぬやう心構るべし

○便所へ案内なす式

客来て便所へ對まなば主人先づ俗仕に命じて案内をなせしむべし此の時俗仕は客も斜に前の方へ立ち

事のみを云ひて決して餘事に移るなかれ而して又九余り近づいて話をなす勿れ若し側に入らば猶更とす

○無暗に挨拶

なすは無禮なり

男女にあらわらず人の家へ招ぶ

少しく腰を屈め案内なり便所より一間ほど手前まで来りなば片手を少しく持ち上げて掌を上になし挨拶すべし客便所に在るの間は矢張り一間ほど手前に持ち居りて出来れば静かに傍に依りて手洗水を進すべし

○寢床を設ける方

古は北枕に床をのぶるを忌むゆへ決して北枕に床をのべざりし可當今は敢て忌みされども先づ北枕には床をのぶるなかれ客若し好むあらば意に反かす北枕にのぶべし大抵は東又は南枕を例となす

○主人中座するときはの禮

主人用事ありて座を去んとする場合に無言のままにて立つべからず必ず客に挨拶なして然る後に立ち

れたるべき主人  
が迎むる物を無  
暗に辨返して主  
人の言葉に従が  
はぬは身誹して  
禮を行ひ居るや  
り考ふれども是  
れ決して然るに  
あらざるなり折  
角の厚意を無に  
して先方の志を  
損じ無禮となれ

上るべし又九客と活半には決して去なむれ活の了る  
を待て去つべし此れ禮なり

第十二章 聚應の諸禮

○膳部の括か九

第十ニ圖



先膳の両縁の中程の處  
を両手にて持ち其持方  
と指を縁にうけて持  
圖の如くさくびて客の  
前に行ひをまつきて下  
に置き膳の両足を押す  
氣味にて少し前へ  
去り一禮して返す

は二度を度とし

て二度より後

先方乃意に従ふ

べし是れ禮なり

○男女共に度

敷に在る場

は越る勿れ

男女に論なく凡

て座敷に於て裁

可通るべき處に

横はりあるもの

は裁場と云へど

くべし返くにも軽く一禮するなりと心得べし

○酒の進め方

通例の烟徳利にて酒を進める時は左の手を以て徳利

の中程を持ち右の手にて底の邊を受る氣味にして夫

へ少しく体を上る心地にて盃に八分目ほど酌すべし

満くと酌すも宜しけれども漏るゝ怒あれば八分目位

可透當なりとす烟細なれば右の手を以て柄杓を持ち

左手を縁に係ふべし

○吸物の進め方

吸物を進むるには先づ蓋に載せ両手にて持ち真向に

差し出すべし若し客の前に種々の物あれば遠宜に右

なり左なり宜き場を見計ふて差し出すべし



も又九草履の如き類にて、決して踏み越るなかれ必ず膝へ直すかゝは其をよけて膝の方を譲る様ふたすべし

○講談席へ出る様式

教師の証議又は貴人の演説なぞを聞きに出るに

○着の出し方

先づ着を盛りたる皿を盆に上せ両手にて捧げ客前に至れば跪きつゝ体をかゝめ差し出すべし

○飯の盛り方

飯を盛には客より差し出したる飯椀を両手にて受け取り其より左の掌に持ちかへ右の手にて八分目に飯を盛り盆に載せ差し出すべし

○湯の注ぎ方

湯を注ぐには湯注の柄を右の手にて持ち左にて底へ軽く手を水け静かに注ぐべし

○膳を下ぐる順序

先づ初に盃臺より下げ其次に向附を下げ其より二人

は一定の様式あるものなり

先づ其の始らざる前に於て着席すべし若し始りたる後に於て出るときは正面演者につ禮し其より左右につ禮なすべし凡て公會の席へ出るには此の心得あるべ

第三十圖



の下より受ける氣味にて支へ而て高く格ど台の

盆を持ち出で先づつ禮なして左右に別れ取肴茶碗盛と各々左右にある賜を下ぐべし

○燭臺の出し方

燭臺を出すには次の間には先づ臺の竿の中段を右の手にて持ち其のら左りと台

きものぞ知らるべし

○頰の懸方

頰は最も座敷に掛くるを宜しとす併れば縁に淡練たるものか又そ平人の頰は床の上には懸ぬかよるし

○懸物の釘の打ち方

凡て懸物の釘を

打つには天井縁より一寸ほど下りたる處に打つをよるしとす

○懸物の懸け方

凡て何種の懸物にかざらす懸物を床に掛けんとするには先懸物の緒を解き懸物の

第十圖



軽く振り手の脊を前になして左の手と並べて背腰の邊に垂れ而して燭臺の前まで歩みゆき膝かに跪つる

て左の手は持たかへ燭燭の尖即ち真を右の手にて伸して其より一程なし燃ゆる燭燭を取り

處まで来る位に持揚げ正面を向て膝かに歩み出り客前に至りなは台を持ちたるまゝにて跪つき膝かに台を置き左の手よりはつして次右の手を去べし而て軽く両手ふて台を押し去る氣味になして進むべし

○手燭の持ち方

手燭を持つには右の手にて台に近づきたる處の柄を受る氣味にて俯けに持ち而して右の手にて柄の終の處を押し入る氣味にて俯けに持つべし決して柄が客の方に向ぬやう持つべし柄を客の方へ向るは無様なりと心得べし

○燭燭の立てるへ様

燭燭を立てるへるには先づ燭燭を右の手にて中程を

を横に一直線に  
なして管竹へか  
け右の手にて竹  
を持ち左にて軸  
の直中を挿へ其  
より管竹にて鑽  
を釘にかける  
後に管竹を持た  
るまゝ両手にて  
両軸の両端を挿  
へ体と共に順次  
に下げべし此れ

て火を移し之を  
にて覆ひ軽く吹  
○揚枝の進め方  
揚枝を進むるに  
これ等六章に迷  
に依り扇子へ揚  
○籠子の持ち方  
酒の進め方に迷  
○家苞の進め方  
家苞を進むるに  
めて客の右腕に  
り若し供あらは  
に直に渡すべし

懸物のかけ方な  
りす  
○昇儀の進め  
方  
客若し昇儀を下  
されたりと清ひ  
たるときは左の  
如くなして差し  
出すべし決して  
一枚文を差出す  
勿れ先づ我が昇  
儀を折たるまゝ

第十三章 婚姻の禮  
婚姻とは物新らし  
大禮にして人生  
さて婚禮の式は  
法に依るがはず  
には其の大禮の  
ら舊習を脱せる  
一度の大禮なき  
用ひられまほし  
○媒酌  
婚姻には必ず媒  
て結婚を媒酌す  
ものなり故に媒  
酌人は相方の家

にて上通りの儀  
二三枚文をのぞ  
き是より餘く折  
の中を納めて右  
の手にて折目の  
下の處を持ち左  
にて下より受る  
氣味にて差志出  
すべし  
上通の儀は二三  
枚のくるは禮ゆ  
へ志るゝ勿れ

迎きて買らべし與ふべしその約束を取り結ぶが第一  
の仕にりて媒酌人先づ約束畧定らば其より見合と稱  
ふ事を行のふなり  
○見合  
見合とは嫁及火聲が互ひに見合するを云ふこと此に  
て此の場合には男は羽織袴の大禮をつけ女は白練に  
て相當の化粧飾を爲すべしさて媒酌人の案内ふて互  
ひ不見合なりたれば是非の答即ち可否の答を媒酌人  
にまで爲すべし此れ一番大事の事に志て心に好まざ  
るを曲げて好むと云ふたり又は義理にて好むと云ふた  
りして其の實心に濟まざるものと互ひに結婚せは家  
事整はずして必ず不和を起すものなれば男女にむし

第三章

○女生言語の  
つわい方

女子は男子と異  
なり成るべく優  
美になさしれば  
女生の本分に反  
するものゆへ勤  
めて萬事を優美  
になすべし取分  
言葉が大切なる  
を以て今日々に

わらず若し少したりとも心に濟ざることを遠慮なふ  
其の澤を媒酌人に物語るべし女に在りては恥かし  
とて心に染まぬをも染み振をして無言で居ゆるもの  
なる可決して恥かしき事にあらざれば可否を判断  
物語るべし是れ一生の大事なればなり

○結婚

結婚とは互ひに相談整のひて種々結婚の物を結ひし  
即ちして吉日を撰火聲より贈る祝儀物を云ふ事にて  
其の贈物は身分の高下に依りて様々あれども先づ分  
限相應になすべし一代一度の事なりとて不相應に嫁  
裁を飾るなかれ必ず身分に應じて贈り物をなすべし  
さて相應の結婚物揃はる先づ親類媒人夫婦を呼び寄

つこふ優美なる  
言葉に左に撰ん  
で述べべし  
子供を。おさな  
いと云ふ  
子供達を。れこ  
九ちと云ふ  
法を。おむつか  
ると云ふ  
眠を。おしずま  
ると云ふ  
起るを。おひな

せて酒肴及び吸湯を差し出し祝ふべし其より香物の  
品々を目録に認め媒人之を惣さへて先方へ贈るなり  
而して此の結納品を先方へ贈るには吉日を撰んで媒  
人より今日吉辰なるを以て結納を贈り理由を媒人品  
々惣さへて先方へ承り丁寧に述べて然る上にて先方  
の父に持参の品を目録に合し目録の順序に並べて渡  
すべし決して順序に違ふ勿れ又此の時媒人は必ず  
乳服着用と知るべし

○結納の認め方  
結納目録の認め方は仮令其の品物数多くあるとも  
決して裏へ跨らぬやう墨黒々と杉原法二枚かされて  
認むべし是れ禮なり其認方假令は左の如し

結納の認め方

鯛	壺折
帯	壺筋
緋麻子	一表
白綾	壺表
錦	三把
以上	

○結納受取方  
媒人結納を持参り来りて渡し  
なは之を清取ふ一定の禮あり  
先づ目録の品々を目録の順序  
に依りて順々に受取堅に並べ  
て然る後其品々を亦た堅に書  
き並べ終に右の通り幾久しく  
芽出度祝ひ納め候と祝して受

ると云ふ  
髪洗を。おくし  
さますと云ふ  
のりものを。れ  
こしと云ふ  
衆ことを。ため  
すと云ふ  
人を呼ぶことを  
おめすと云ふ  
出行を。おひる  
いと云ふ  
魚のことを。と

取書を認め媒人に渡すべし此の式了りたれば酒肴を  
出して媒人に納り祝ふべし又此の物には人数を付  
其々祝儀を差し出すべし是れ禮なり  
以上述べたる式に依りて既に結納の約整ひたれば此

と云ひ土産の  
 ことをおみやげ  
 は云ふなり  
 気分のおろそ  
 ことを。御機嫌  
 しきと云ふ  
 熱の出るを。お  
 めると云ふ  
 喧嘩のしきを。  
 いさゝひと云ふ  
 以上  
 第四章

の時よりして帰るころ或は乞服袋の言葉を忌むべし  
 此れ最も注意すべき事なり  
 ○嫁持物の贈り方  
 嫁の道具を贈るには半切依に算筒長持衣は何れも持  
 受すべき品数を一折にて認め遣はすを禮となす又た  
 受取書にて持受なりたる品々を明細に先方の目録通  
 り認め了終に唯正に清取申候とのみ死して先方の名  
 宛をかき渡すべし  
 さて昔は嫁の持物を贈るに大抵祝言の當夜贈りしむ  
 今は然らず兩三日前に贈れり此は勝手たるべし  
 次に持物に三折とか五折とか或は十折とか種々あれ  
 ども是れ亦た結体と合じく身分に應じて贈るもの由

○婿禮のしき  
 忌み慎しむ  
 べき言葉  
 式禮のしきふた  
 忌み嫌ふ言葉  
 あり慎しむ居る  
 べき事なり左の  
 言葉なり  
 ○さる○のく○  
 難る○別る○  
 きむる○禱さ○  
 返す○戻す○さ

へ必ず身分相應になすべし荷少なきとて取て耻にあ  
 らず又た多きとて取て慈にもあらざれば程に越へぬ  
 矣りなすころ禮の本分とぞ知られ九し  
 ○嫁途虫の禮  
 嫁が親が實家を出るとき一定の式あり之を途虫の禮  
 と云ふ云ふまじり嫁一旦親の元を離れて嫁着たる上は再  
 び帰らざるもの由へ暇乞の盃を爲す之を途虫の祝と  
 云ふて盃三献を親となすべし此の式儀は介添人は途  
 中無く心を用ひて嫁を痛り聲の家へゆくべし  
 ○遊ひ小袖の事  
 遊小袖とは嫁入の當夜聲より小袖一重を嫁に贈る之  
 を云ふなりさて其の贈方は小袖壹重を襟と襟と合せ

るふ○鏡く○返  
 ぞく○帰る○恨  
 む○うすく○  
 ぬる○又々○痛  
 く○重ねて○憎  
 む○ねたむ○返  
 すく○れくり  
 此れ等の言葉は  
 最も忌み嫌ふて  
 不吉となすゆへ  
 婚禮のときは慎  
 しみて遠はぬが

糸にて軽く綴じ袖をかへさずして毳に載せ遠はす可  
 迎小袖贈り方の程なり  
 ○祝言の程  
 嫁の聲の門前まで来らば家の男達は互ひに之を出迎  
 へて丁家に種をなし家の内へ案内すべし  
 さて嫁家の内へ入り来らば媒人嫁を案内して部屋  
 へ通し此にて一寸湯など出して一休憩なし其より媒  
 人嫁を伴れて化粧の向へ通し此にて化粧をなし衣服  
 を改め其より待女郎の案内にて祝言の座へ出るなり  
 新て祝言の座に来らば待女郎は嫁を主座に直して其  
 の側に座し待女郎は夫を客位に座せしめて公しく其  
 の側に座すべし俱し待女郎は嫁の座より少しく進み

よろし  
 ○婚禮に忌む  
 べき衣服の  
 染め色合  
 婚禮のとき言葉  
 に忌言ある通  
 り亦た衣服の染  
 色も忌み嫌ふ  
 色あり左の如し  
 と知らるべし  
 桔梗色○らさ  
 き色○茶がへし

て右の方に坐すものと知るべし又た嫁と聲を真正  
 面に坐せしむなれ少しく斜に坐せしむべし  
 新坐し了りなほ先づ小女一人を嫁の後に坐せしむべ  
 し此より祝言の杯に移るなりさて祝言の仕方は初に  
 手掛を出して待女郎目度と丁家に挨拶なりたる上  
 嫁と聲に搦乗昆布のしを赤らす時に同じ女二人出で  
 備へある瓶子一つずつ取りて下座に下るべし此の  
 時酌にまづべきもの二人瓶子提を取つて同じく其へ  
 出で下座に座し其より女提を取て之を俵けに置き  
 酒を提子へ移り又た男提を取て俵けに女提の上へ置  
 き酒を提子へ移り又た提子より酒を提子の中へ急ぎ  
 程に移して瓶子提子を取り膝を直して扱へ居る此の

○藤色○梅さへ  
 ○無杖場○氣  
 の種類等なり  
 以上の色合を凡  
 て忌むものゆへ  
 餘り用ひざる可  
 よろし  
 但し女子にあり  
 ては懸模縁場は  
 妨げなきものと  
 心得られたり  
 次に婚禮の時に

時に眞の引渡場出で夫婦を待女郎に居ゆるべし  
 次に杯の垂活なす婦人其へ出で差圖して盃三方を嫁  
 の前へ直し上は杯を取り了嫁に渡すべし時に酌人來  
 つて酌を爲し嫁は一献受けて飲み次に今一人の酌來  
 つて鏡子に酒を加へ返くべし其の鏡子にて又た一献  
 を飲み又た加へて一献飲む時に其の杯を取りて元の  
 通り三方の上に載せ聲の方へ持ちゆきて前の如くに  
 酌を爲すべし聲飲む奉三献にして其の杯を下へ廻り中  
 なる杯を取りて三献飲みて杯を上になり置けは酌人  
 取了之を嫁の前に持ち行くべし媒酌は其杯を取つて  
 嫁に渡し三献飲ましめ其の杯を又た下へ廻り大ひな  
 る方の杯を取つて渡し三献飲ましめて其の杯を上せ

往後なを文章類  
 にも前に述ぶる  
 爵の言葉は用ひ  
 ざるものと承知  
 あらるべし

○長柄鏡子の  
 柄の考方

長柄の鏡子の柄  
 を考には月の數  
 に從ひ十二考べ  
 し若し其考が圓  
 考ならは十三と

て聲の方を持ちゆかりむべし聲取つて飲む奉亦九三  
 献にして此にて飲み候むるなり  
 新様になして飲み候めたれば杯を元の如く重ねて直  
 すべし酌人は鏡子授子を引き三方を引きて後に聲は  
 先づ席を靜にまつべし聲立て座を返きなは媒人は嫁  
 を誘ふて丁寧に舅姑に對し挨拶對面なさしむべし  
 此の間媒人即ち介添人は始終嫁の方に附き添ひて萬  
 事世話を爲すべし  
 以上述べたる如く大中小の杯にて三献づゝ都合九献領  
 けねはならぬのみならず座敷にて又た酒を飲ねは坐  
 らぬ次第ゆへ酌人は心を用ひて酌する似佐に酌なほ  
 其にて宜しきものなり決して満々を酌なかれ



場すべし  
次に授子も亦九  
鏡子の通り合じ  
様に紙にて手を  
巻くものぞ知ら  
るべし

○男蝶の折り

男蝶を折には松  
といづり葉を  
以て折るものに  
て此を鏡子の口

祝言の杯相濟なは即ち色直と云ふ事を  
色直まで座敷手掛三杯なぞと稱ふ事あれども方今  
は餘り行はれざるやうなるを以て略しぬ

○色直

色直とは夫婦おための杯階ふりなふ濟みて後嫁部屋  
に入りて色の小袖と着替るを稱して色直と云ふ此の  
時聲の方より贈り越したる小袖即ち迎小袖を着るべ  
し是れ禮なり  
小袖着換なは先づ座敷に出で夫婦及び親類一同と酒  
事あるべし此の時此鏡子杯等は皆な金銀其の他色取  
あるも注を用ゆべし而して此度の杯は互に三献にし  
て先づ媒人より夫に酌し待女即おさへの着を夫婦に

へ金の水引五本

を以て結ひつく

るなり

値し水引にはち

まみせりくるも

のぞ知るべし

○女蝶の折り

女蝶の折方は松

と橋とをかんな

べ又は鏡子の口

へ銀の水引にて

糸らすべし

さて此よりして湯漬鯛の吸揚其他膳部を差し出して  
盛に親類一同と共に祝ふべし其の膳部の出し方は先  
づ第一に饗膳第二に菓子茶を出し其より本膳を差し  
出すべし此の時別間にて小聲にて高砂なぞを謡ひ祝  
ふなり此の間に於て媒人は能く機會を見計ひ新夫婦  
を席より返かひめて床盃を賜さしめ凡ての禮式を了  
るべし併れども親類達は十分酒飲みかわりて盛に祝  
ひ俵むるがよるし

○床盃

床杯とは聲が嫁の部屋に入りて嫁が主となり塗盃に  
て嫁より夫に進むる杯づとなり併れは親睦文白髪

結ひつくべし矢  
扱水引の数は五  
本なり又九合じ  
く水引にはすこ  
みをかぐるもの  
と心得べし

○媒人と夫婦  
その杯

婚禮の時に媒人  
と夫婦その杯は  
とわり此の禮は  
夫婦の杯即ち三

初の杯にてあれは禮儀正しく行ふべし  
此の他舅姑其の他小姑などへ結の杯とて嫁の行ふ盃  
事あれども略しぬ

○酌の禮式

酌をなすに一定の式あり先づ長柄の銚子なれば右の  
手を折目の處へつめて左れ手にて折目の上を持つべ  
し此の如くもちて左の膝をたて酒を酌べし其の酒を  
酌むと左には必ず右の膝をつくべし  
加は本酌の左に座を定むるも式なれども場合に依り  
右に和るも格別妨なし酒を加ふる毎に少づゝ加へる  
よりなすべし  
加をなすに敷居越しやなすなれされど子敷に依り

々九度の式も濟  
み舅姑その杯も  
濟みて色直をな  
すの前に於て行  
ふものなり

其の式は媒人と  
夫婦と相對して  
鯛の吸物を出し  
第三番目の一番  
火きゝ杯のみを  
一つ三方に載せ  
て別に銚子を取

第五十圖



敷居越しになさざるを得ざる場合には授子丈敷居の  
内に入れて加をなすべし  
次に授子の持ち方は右の手にてつるを取り左の拇指  
を授子の縁にうけ残る四ツの指にて授子の中程に添

へ加へべし是れ加の仕方な  
り依て本酌よりは寧ろ加の  
方が滑り折れは加に出るも  
のは十分注意して行のふべ  
し  
酌入酌中は決して立て歩  
む勿れ必ず膝にて進退なす  
べし若略式か或は内祝言の

り寄せ三献づゝ  
 互ひに飲み交す  
 なり之を夫婦と  
 媒入との盃とは  
 云ふなり  
 ○嫁・産物の  
 事  
 嫁より子産物と  
 して舅姑及火小  
 注へ相志の品物  
 を贈るべし又た  
 先方の家の奉公  
 ときなれば立て歩むも構ひなし  
 若し酌をなす時に鏡子にあらずして洞鑰にてあらは  
 其の持ち方は前に記るしたる櫻子の持ち方どりにてし  
 るし又た鏡子も本式なれば片口を用ゆべし決して両  
 口の物を用ゆべからず両口の物は亂酒の時に用ゆる  
 ものなるがゆへに忌なり依て若し両口の時には必  
 ず其の片口を依にてまき片口となして用ゆべし是れ  
 禮なり決して忘るゝ勿れ慎むべし  
 其他衣の飾附方嫁部屋の飾附方等其々式あれども身  
 分の高下等に依りて異なれば一々記さず清ふ涼せら  
 れよ  
 以上は男女日常必要なる禮式のみを撰んで掲げしる

人へも其や相當  
 乃品物を贈るべ  
 し之を嫁の土産  
 賜とは云ふなり  
 而して此は祝儀  
 前へ必ず祝言の  
 前に贈る事と知  
 るべし此れ亦た  
 禮なりと知らる  
 べし

上欄了り

男女諸禮式大全了り

のにじて素より盡せりと云ふべららず故を以て尚ほ  
 足らざる所は上段中に補ひ置きたりされども未だ以  
 て悉く禮の式を盡せりと云ふ餘はす然りと雖ども先  
 づ本書に記載ある所の事板を一つ々記懸されて常に守  
 られたは蓋し人中に出で耻る事なからむと信ずるな  
 り清ふ才子淑女本書に依りて禮の大意を會得されん  
 事を希望に堪へざるなり

明治廿九年九月三日印刷  
同 年九月六日發行

定價三十錢



編輯者

京橋區新橋南金六町五番地

和田庄藏

印刷者

日本橋區蛸壳町三丁目拾壹番地

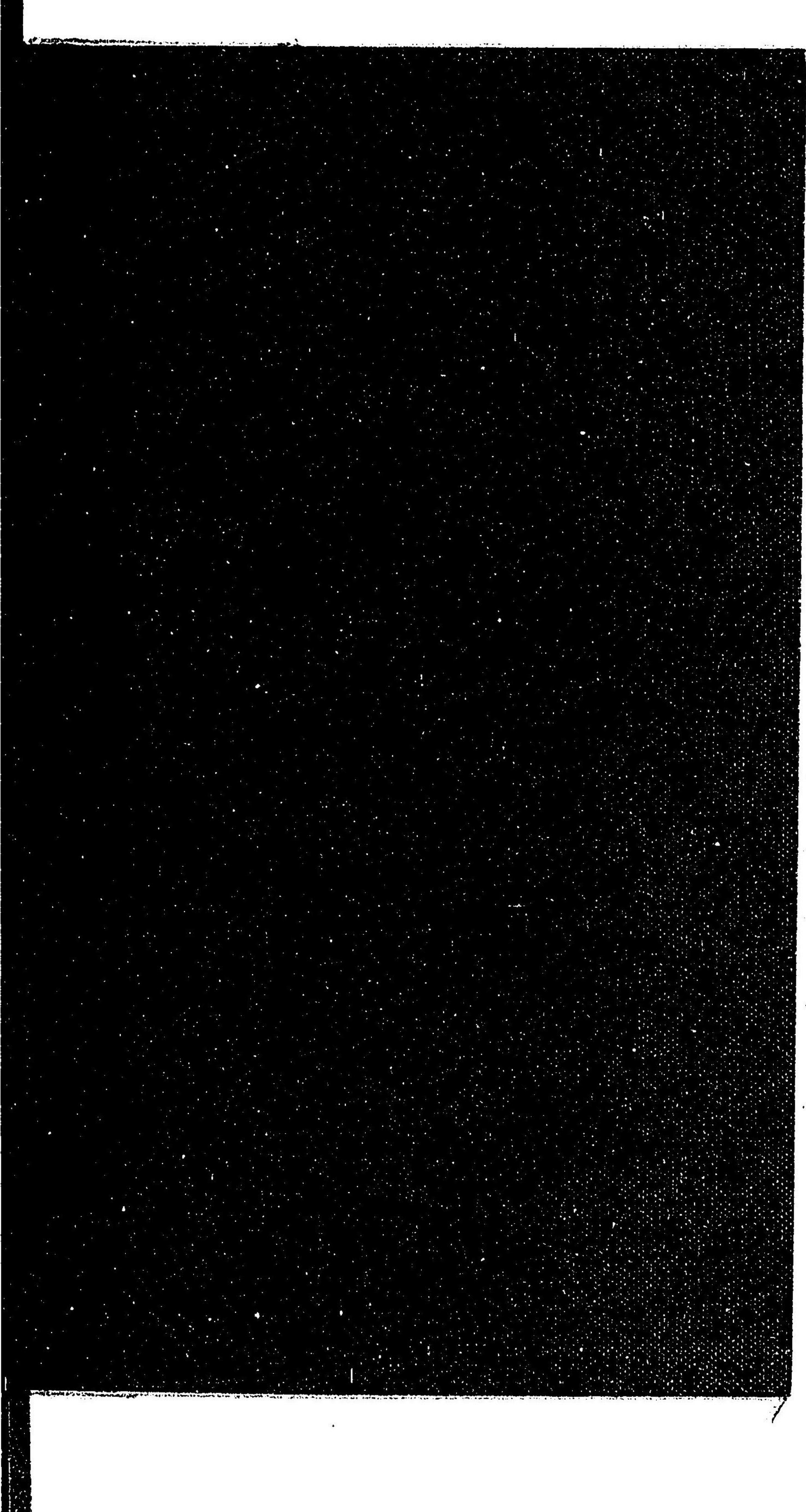
大島寛治

發行所

京橋區新橋南金六町五番地

文寶堂

1221



特 26  
501

011982-000-9

特 26-501

小笠原流男女諸礼式大全

省軒 外史 / 著

M29

AAG-0030

